

縦断社会から横断社会への変革点

宮 治 眞

名古屋市立大学 客員教授

愛知会場 基礎課程(人体構造・機能論) 講師

昨今、医療が混迷を深めているといったら言い過ぎであろうか。何がそうさせているのか。社会の事象は 1) 経済・法律、2) 科学・技術、3) 教育・倫理、を基本に成立している。そして医療が各々の分野で深化を遂げていく一方で、全体としての調和がとれていない。経済は経済単独で、あるいは教育は教育単独で、つまり独歩の縦断社会としてのみ深化し続けているのが現在の医学・医療を取り巻く状況といえよう。法律の尊厳死、技術の代理母、倫理のインフォームドコンセントなどなど枚挙にいとまがない。

このような混迷の中で、診療情報管理は、そして診療情報管理士は、さらには通信教育は、どのように概観し、位置づけられるべきか、もう一度振り返るべきときだ。かつて私は(日本病院会誌 34 (2) 1-3 1987) 診療情報管理士の役割を 1) 医療統計に関与する診療情報管理士、2) 各種医療者のコーディネートとしての診療情報管理士、3) 単純労働者としての診療情報管理士、の3つの職務を提示した。

医療の一つである診療情報管理も社会を形成しており例外ではない。たとえば診療情報管理に関わる経済的インセンティブ、根拠となる法整備はどうなのか。科学の進歩に伴う新しい医療に関する診療情報管理はどうあるべきか、電子カルテシステムという技術革新における診療情報管理はどうあるべきか。診療情報管理を通信を用いて行う教育はどうあるべきか、医療における守秘と公開の二律背反への対応は倫理を包含するのではないか。ここには診療情報管理においてすら、横断的管理が抜け落ちているのではないか。横断社会としての診療情報管理が見えてこない。

なぜ見えてこないのか。日常業務に埋没し、全体を俯瞰する想像力の欠如かもしれないし、全体という調和それ自体が科学であることへの認識不足と捉えて仕方がない。どうすべきか。残念ながら正解はもちえないが、日常の埋没業務への再検討ではないか。どのような些細な改革も、きっと核心に迫る課題を韜晦しているはずだ。縦断社会から横断社会への意識的な変革点を見定めることであり、要は変革点を認知できるか否かである。こうしてみると、各種医療者のコーディネートとしての診療情報管理士は一つの任務となりうる可能性を秘めているかもしれない。

任務であると断言できないもどかしさを正直に吐露しておこう。それは検証が行われていないからである。コーディネートという調和を見出すことは数理の世界であり、科学的に解決できるはずである。もしも陥穽があるとすれば、それは時間、時代の変化をどのように勘酌するかである。診療情報管理は、これが医療の質の向上に有用であるという評価なしに、当然ながら診療情報管理士の任務は規定しえない。縦断社会における時間推移を考慮した評価はしやすいが、横断社会におけるそれは、まだ未知の課題なのかもしれない。